



Title	S. ブラックバーンの準実在論と道徳の自然化 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	小林, 知恵
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14749号
Issue Date	2021-12-24
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/83848">http://hdl.handle.net/2115/83848</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chie_Kobayashi_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：小林 知恵

## 学位論文題名

### S. ブラックバーンの準実在論と道德の自然化

#### ・本論文の観点と方法

本論文はイギリスの哲学者 S. ブラックバーン (Simon Blackburn 1944～) のメタ倫理学理論である、準実在論 (quasi-realism) について論じたものである。本論文ではブラックバーンの道德哲学の目的である「道德の自然化」について、準実在論はどのようにしてその目的を達成しようとしているのか、さらにそれからどのような規範倫理学理論が導かれるのかが検討される。さらにブラックバーンのメタ倫理学上の諸理論 (投影説・表出主義・道德的真理の構成説) の明確化を通じて、準実在論の独自性が示されると共に、これらの諸理論と準実在論が支持すべきテーゼ群との間に整合性が成立するかが検討される。また本論文では準実在論が、相対主義に陥るのではないかという批判に答えることが試みられる。

ブラックバーンは、「道德的言明が真理適合的であること」「道德的真理が心的独立性を有すること」「道德的知識の獲得に資するような道德的推論に関する基準が存在すること」のいずれも認めるため、その立場は実在論的であるようにも思われる。しかしブラックバーン自身は存在論的自然主義の立場をとりつつも非実在論者であるため、自然主義的実在論の主流であるコーネル実在論 (非還元主義的自然主義的実在論) の立場に与することはできない。さらに彼は道德的真理の対応説も採用しないため、ブラックバーンの理論は (1) 存在論的自然主義、(2) 道德的真理の非対応説、(3) 道德的言明の真理適合性、(4) 道德的真理の心的独立性 (5) 道德的推論の基準の存在、という五つのテーゼの集合であるとされる。これについて説明するために、本論文では (Ⅰ) 生成論的考察 (道德的判断はどのようにして生じるのか)、(Ⅱ) 意味論的考察 (道德的言明は何を意味しているのか)、(Ⅲ) 真理論的考察 (道德的判断は真理値を持つことができるのか、さらにそれはどのようにして正当化されるのか) という次の三つの考察課題への応答が試みられる。第一の生成論的考察では、「投影説 (projectivism)」、つまり道德的性質の認知とされているものは実際には自然的事実を感受して生じる反応の投影であるとする立場、が示される。さらに第二の意味論的考察では、「表出主義 (expressivism)」、つまり道德的言明の意味は態度の表出であるとする立場、について考察される。第三の真理論的考察については、投影説と表出主義に与したとしても「真理の構成」というアイデアによって、道德的判断の真理適合性や道德的正当化を認めることが可能であると主張される。本論文ではこのような考察を通じて、ブラックバーンの道德哲学の独自性を示すことが試みられる。

#### ・本論文の内容

本論文は序文及び本文六章から成る。

序文では準実在論が提唱される以前のメタ倫理学について概観されたあと、ブラックバーン自身の問題意識が確認される。

第1章「ブラックバーンの道德哲学」では、ブラックバーンの道德哲学の目的と全体像について論じられ、その中核である「準実在論」を構成するテーゼ群が析出される。

第2章「投影説」と第3章「表出主義」では、道德的判断の生成過程と意味を、態度や感受性を軸にして説明するという、ブラックバーンが用いた方法について論じられる。

第2章「投影説」では、投影説と準実在論を構成するテーゼ群との関係について考察される。投影説では、道德的判断の発話の過程では、実際には実在しない道德的性質を事物に投影することによって、あたかも当該の判断に対応する道德的性質が実在するかのように語っていると説明されている。このような説明では、道德的性質や道德的事実は措定されておらず、投影説はテーゼ (1) と整

合的である。さらに投影説に向けられる批判のうち、コーネル実在論者のスタージョンが提起した「意味に基づく論証」と「説明に基づく論証」への反論が試みられる。そして投影説が責務の感覚を弱めるのではないかという批判に対しては、「教育」の効果を重視するブラックバーンの応答が検討され、このような批判が決定的なものとはならないことが確認される。

続く第3章「表出主義」では、表出主義が準実在論を構成するテーゼ群とは相容れないのではないかという懸念について検討される。表出主義によれば、道徳的判断は行為や人物に対する肯定的あるいは否定的態度のような非認知的な心的状態の表出である。表出主義もテーゼ(1)と整合的であり、さらに(2)～(4)のテーゼのいずれとも不整合ではない。(5)のテーゼについては、表出主義に基づく推論規則の適用可能性に疑義を呈する「フレーゲ・ゲーチ問題」についてのブラックバーンの応答と、この問題への有力な応答を備えた代替案であるハイブリッド表出主義とが比較検討される。表出主義の立場では、道徳的言明にも、自然的言明に対する推論規則と同型の操作が適用可能であるとされる。そしてフレーゲ・ゲーチ問題に対する彼の応答は決定的なものであるとはいいたいものの、ハイブリッド表出主義には問題点があるため、彼は自らの表出主義を保持するべきであり、ハイブリッド表出主義に転向すべきではないとされる。

第4章「道徳的真理」では、ブラックバーンが提示した道徳的真理の構成説について概観され、この真理論が、先の五つのテーゼのすべてを包摂することが確認される。またブラックバーンの真理論については、著作間で整合説からミニマリズムへの転回が生じているという解釈もあるが、小林氏はそれに対して、彼は一貫して真理述語が実質的な内容を持つことを認めており、真理の整合説に近い立場を採用し続けていると主張する。そして、ブラックバーンはプラグマティックな真理論を援用することにより、道徳実在論に対する準実在論の独自性を明らかにしたとされる。

第5章「相対主義と心的独立性」では、ブラックバーンが提示する真理論では相対主義に陥るのではないか、という懸念に応答できるかという問題について論じられる。ブラックバーンによれば、道徳的意見の対立に際して要請されているのは、どの意見も真であると見なすことではなく、感受性の欠陥を特定することを通じて、道徳的意見の客観性や信念形成プロセスの信頼性を評価し、意見の優劣を決めることである。この応答には、実質的な真理概念と主体のあり方の間に生じる緊張関係を生まないという利点がある。だが感受性の欠陥を見極める実効的な方法を特定するためには規範倫理学上の考察が必要であることが指摘される。さらに五章の後半では、「進化論的暴露論証」との関連で、S. ストリートが提起したダーウィンのジレンマに対して、準実在論の擁護を試みる先行研究について検討され、準実在論はこのジレンマを構成する前提に与していないとされる。

第6章「準実在論と規範倫理学」では、準実在論の規範倫理学上の含意について論じられる。ブラックバーンはメタ倫理学上の考察を行う理論的観点と、一階の倫理的考察(規範倫理学的考察)を行う熟慮的観点を明確に区別しているが、準実在論と親和性を持つ規範倫理学理論として動機功利主義が導かれる可能性を示唆している。これに対して小林氏はその導出の過程について十分な説明がなされているとはいえず、感受性が果たす役割に着目して、投影説と動機帰結主義を架橋する議論の構成を試みている。